

聖書日課 『からし種』 2023.3.12-3.19

<p>3月12日 (日) 士師記 20章</p>	<p>「イスラエルの人々は主の御前に上って、夕方まで泣き続け、主に問うて言った。『兄弟ベニヤミンと、再び戦いを交えねばなりませんか』」(23節)。ベニヤミンの「非道」を裁くために立ち上がったイスラエル。しかし兄弟同士で殺し合うことほど空しく哀しいことはない。兄弟同士であっても、「共に」生きるために、私たちは和解の主を必要とすることを覚えたい。</p>
<p>13日 (月) 士師記 21章</p>	<p>「そのころ、イスラエルには王がなく、それぞれ自分の目に正しいとすることを行っていた」(25節)。ベニヤミン族の蛮行に対してイスラエルの人々は「一人の人のように」立ち上がったが、それは「兄弟同士」の哀しい殺し合いであり、多くの血が犠牲となった。その元凶はどこにあるのか。聖書は「自分の目に正しいこと」しか見ようとしない人間の愚かさを示している。</p>
<p>14日 (火) ルツ記 1章</p>	<p>「どうか、ナオミ(快い)などと呼ばないで、マラ(苦い)と呼んでください」(20節)。異郷の地で夫に先立たれ、二人の息子をも失ったナオミは、自分の名前が呼ばれることが苦痛でしかなかった。けれど、ナオミは独りではなかった。彼女の涙と苦悩を、自分の心のように良く知っているルツがいた。インマヌエルの主はナオミの傍らにルツを置いてくださったのである。</p>
<p>15日 (水) ルツ記 2章</p>	<p>「イスラエルの神、主がその御翼のもとに逃れてきたあなたに十分に報いてくださるように」(12節)。親鳥はヒナを外敵から守るために翼で覆い隠し、体を張って戦う。ヒナは独りでは生きていけない。親鳥の慈しみ深い愛に守られてはじめて生きることが出来る。わたしたちも「あなたの翼の陰に隠してください」(詩編17:8)と、主のもとに帰る信仰をいただいて。</p>

聖書日課 『からし種』 2023.3.12-3.19

<p>16日 (木)</p> <p>ルツ記 3章</p>	<p>「今あなたが示した真心は、今までの真心よりまさっています。わたしの娘よ、心配しないでいい。きっと、あなたが言うとおりにします」(10-11節)。ボアズとルツの間に交わされた敬意や厚意が少しずつ愛に変化していく。二人の愛の美しさは、その心の中心に神への畏れがあるからではないか。情愛に流されるのではなく、神への畏れが人の愛を美しく育む。</p>
<p>17日 (金)</p> <p>ルツ記 4章</p>	<p>「近所の婦人たちは、ナオミに子供が生まれたと言って、その子に名前を付け、その子をオベドと名付けた」(17節)。親戚でもない女性たちが名付け親になるのは旧約ではこの箇所だけ。それほどにナオミとルツの物語は女性たちに神の慈しみと希望を示すものとなったのだろう。このオベドを通して異邦人ルツはキリストの恵みの系図につながる者とされた。</p>
<p>18日 (土)</p> <p>I サム 1章</p>	<p>「ハンナは答えた。『いいえ、祭司様、違います。わたしは深い悩みをもった女です。…ただ、主の御前に心からの願いを注ぎ出しておりました』」(15節)。もう一人の妻ペニナの敵意と悪意がハンナを苦しみ続けた。しかし元凶は、「妻」を男の「所有物」として扱ってきた社会にある。主はハンナの深い苦しみから注ぎだされた祈りと願いを受け止めてくださった。</p>
<p>19日 (日)</p> <p>I サム 2章</p>	<p>「わたしはわたしの心、わたしの望みのままに事を行う忠実な祭司を立て、彼の家を確かなものとしよう。彼は生涯、わたしが油を注いだ者の前を歩む」(35節)。これは祭司エリのもとに来て告げた神の人の言葉。ならず者である息子たちを強く責め立てず、自分たちの私腹を肥やした祭司エリに対する神の制裁。そして、神はサムエルを用いられていく。</p>